

「ご近所」で見守り、応援

700万人時代

認知症と
ともに生きる

誰もが外出しやすいまち、外出したいと思えるまちは、どのようなまちなのか。駅ホームを会場に認知症の本人たちが楽しく過ごす「駅カフェ」など、認知症の垣根を取り払う取り組みを進めている京都市岩倉地域包括支援センター長の松本恵生さん(53)は、経験の共有と、地域での声掛けや店舗などでの誰もが利用しやすい工夫などを提案する。

(聞き手・鈴木雅人)

認知症の人が増え、独り暮らしも多くなる。行方不明者の数は、これからも増えていくだろう。社会には認知症イコール「徘徊」する人で、外に出ずに自宅にいてもらいたい、と考える風潮が根強いと思われる。しかし、それでは行方不明者の増加には対応しきれない。

認知症の初期の人は、多少迷いながらも外出してもらった方が症状

京都市岩倉地域包括支援センター長
松本 恵生さん



の進行を遅らせることができる。症状は初期から重度まで幅広く、全ての人に見守りが必要なのでない。初期の人が電車やバスに乗り、自由に出掛けてもらえるまちづくりを目指した方がいい。自宅に閉じこもったままだと筋力は落ち、楽しみも生まれにくく、症状は進行していく。人と会って話し、笑うという、今までやってきた当たり前前のごを続けることが大切だ。

そのためには、失敗があっても周りが声をかけたり、地域で見守ったりすることが欠かせない。特に「ご近所さん」に本人を知ってもらいたい。みんなで応援したら、地域で暮らしていくことができる。離れて暮らしている家族も安心できる。外出は人としての尊厳にもかかわる。「あすは自分かも」と考えて応援してほしい。

スーパーや銀行なども、認知症の人が来店することを想定して対応力を付け、顧客として利用を続けてもらうことを考えてほしい。少しサポートすればうまくいく人はたくさん



そのためには、失敗があっても周りが声をかけたり、地域で見守ったりすることが欠かせない。特に「ご近所さん」に本人を知ってもらいたい。みんなで応援したら、地域で暮らしていくことができる。離れて暮らしている家族も安心できる。外出は人としての尊厳にもかかわる。「あすは自分かも」と考えて応援してほしい。

ハラスメントNO

述からは、芸術分野の構造的課題も浮かぶ。文化庁の有識者会議は昨年、適正契約に関するガイドラインをまと

28日午後7時現在
76人(+5万4843) 6万7683
岡山 471750 (+990) 770

組

五八

東京五輪
クのテスト
談合事件の
会の大会論
業側とやり
望を聞き取
あることが
の取材で今
検特捜部と
は元次長が
担い、広生
当者らと妥
とみて、独
な取引制限
を視野に捕
電通の指
特捜部の任
認めてい
明。特捜部
について

関係者は